

創立記念日特集

専修大学を生んだ若い4人の夢と志

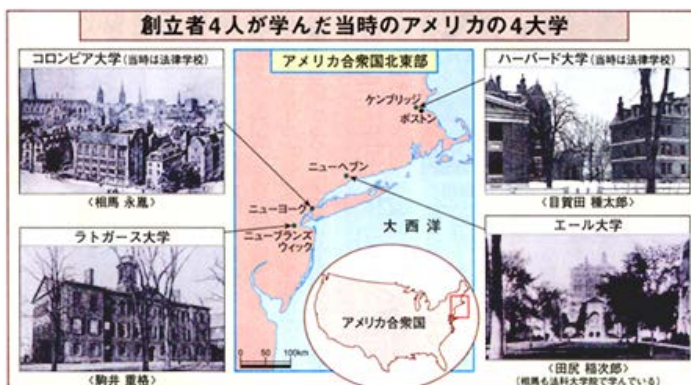
法律と経済を日本語で 米国留学中に創立構想

専修大学の前身である専修学校は、明治13年(1880)、日本最初の私立法律経済学校として誕生した。創立と育成に大きな役割を担ったのが相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人の若者たちだ。いずれも幕末、明治維新の動乱の中から巣立ち、アメリカに留学を果たした。4人は現地で知り合い「帰国してから日本語で法律、経済を教える学校を設立しよう」と構想を立てた。

4人の生い立ちと留学するまでのいきさつ、アメリカでの様子や出会いと交流をたどり、創立者たちの大いなる夢と志を追ってみよう。※参考文献『専修大学百年史』



(左から、相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格)



● 相馬永胤 ●

辞書一冊懐に渡米

田尻らと「日本法律会社」

動乱の世に初志を貫いた不屈の行動家、相馬永胤(そうま・ながたね、1850～1924)は嘉永3年、彦根藩の武勇の家生まれ。アメリカ東インド艦隊司令長官のペリー率いる黒船4隻が浦賀に来航したのは、その3年後。さらに1年後には、来航したペリーと幕府との間に、日米和親条約が調印され、日本は開国への一歩を踏み出している。



少年のころ相馬は、江戸赤坂の彦根藩中屋敷に住み、漢学を修めた。明治元年(1868)に戊辰戦争が勃発。藩主の井伊直弼が殺害された「桜田門外の変」を機に尊皇攘夷に切り替えた彦根藩は、官軍に属して東山道を江戸に向かった。

当時18歳の相馬も藩兵として出陣、関東から奥州に転戦して活躍。この時の働きで、相馬は彦根藩内に広く認められるようになった。

数々の困難乗り越え

帰還後、安井息軒の塾生となり漢学を学んだ後、明治3年(1870)新政府の命による彦根藩からの欧米視察員に選抜される。出港地の横浜へ向かうが、予期せぬ出来事に巻き込まれ、渡航不可能になる。しかし望みを捨てず即刻、藩邸に強く願い出て、ヘボンの字書『和英語林集成』1冊を懐に、アメリカに旅立った。この時21歳。

まず、西海岸のオークランドで大学教授の家にホームステイをした。英語の素養はなく、第一の難関は語学だったが、教授夫人から英語を学び、日常の会話には不自由のないところまで習得した。東部に移った相馬は当初、軍人を目指したが、ウエストポイントの陸軍士官学校は、外国人の入学を許可しないことが分かり、法律、経済の学校を目指す。ところが明治6年(1873)、突然、日本の文部省から帰国命令が届いた。同年末、いったん帰国して留学資金調達のため奔走。旧主・井伊家の教育資金の中から留学費が支給されることになった。

こうして再渡米した相馬は、ニューヨーク州ピークスキルアカデミーに入学、同高等学校商業課程を、きわめて優秀な成績で卒業。この間、重い眼病を患い、失明寸前となったこともあった。さまざまな危機や難関を乗り越え、明治8年(1875)、コロンビア法律学校(現・コロンビア大学)に入学する。

相馬はここで、留学生監督として活動していた目賀田と知り合う。ほかに留学生仲間の江木高遠、三浦(鳩山)和夫、清水篤守、神鞭知常とも出会い、法学徒のクラブ「日本法律会社」を設立。今で言うクラブ、研究会だが、専修学校誕生の土台となったものだ。

会員たちは毎週1回集まり討論を重ね、法律の研究会や討論会を開き、演説の練習や、法律語彙辞典の編纂を試みた。団結はさらに強まり、こうした仲間との活動から、帰国したら東京で法律学校を興し、日本語で法律を教える夢が芽生えていったのだ。

当時、同校には、二つの法律クラブがあり、模擬裁判を競演していたが、相馬も積極的にここに参加。大学の学業のかたわら、構内の法律図書館に通い、判例を読みふけた。こうして約2年で同校を卒業し、学位を得た。

相馬は法律をさらに研究し、加えて経済学を修めるため明治10年(1877)6月、ニューヘブンに移り、エール大学大学院に進む。ここで田尻稲次郎と出会う。田尻と同じクラスに学ぶ相馬は、毎日のように部屋を訪ねた。理財学や統計学の研究では先輩である田尻に、日々の講義の内容を復習してもらったのだ。二人の友情が始まったのはこの時で、二人は終生の関係を育んでいった。

相馬は、駒井重格ともここで出会い、さらに多くの専門分野の留学生と新たに幅広い学術分野のクラブ「興学社」を結成。勉学を終えた帰国者も増え、すでに「日本法律会社」の本社は日本に移されていた。相馬はその懐旧記で、「余ニウヘブン滞在中ニハ当時同地に在リタル鳩山和夫、田尻稲次郎、箕作佳吉、松井直吉、目賀田種太郎氏等ト、時々会合シテ各自研究ノ学科ニ付演説を為シ」と「興学社」での活動を記している。

のちに専修学校を創立する法学徒と経済学徒の二つの輪は、こうして結ばれた。明治12年(1879)帰国。

● 田尻稲次郎 ●

新政府の幹部候補として — 経済・財政学学ぶ

田尻稲次郎(たじり・いなじろう、1850~1923)は、嘉永3年、薩摩藩京都上屋敷に藩士の三男として生まれた。父の死後鹿児島に移り、兄たちが文久3年(1863)の薩英戦争に出陣するのを見送り、鹿児島が砲火に包まれるのを見て、他国から侵されない国をつくろうと文武両道を志すようになった。



16歳で洋学を学び、長崎に遊学した後、上京。慶応義塾、開成学校、海軍兵学寮、大学南校に学び、刑部省から国法民法課勤学としてアメリカ留学を命ぜられる。

当時、各省庁は将来の幹部要員を育成するために政府に申し立てて、南校生徒中の俊英を名指して海外へ留学させた。明治4年(1871)、田尻は他の3人の留学仲間とともに、アメリカの土を踏んだ。

現地では大学に入学する前に、英語を十分に習得し、普通科を履修する必要があった。まずニューヨーク郊外の学校で英語を初歩から学ぶため、小学校3年級に編入させられたと思われる。子ども扱いされるのを嫌った田尻は、次いで対岸のニュージャージー州ニューブルンスウィク(現在のニューブランズウィック)のアカデミーに転じ、予備教育を受ける。

しかし、宗教に偏して科学を後まわしにしていること、また極端な自由主義を唱えているなどから、その学風にあきたらず、各地の普通校、予備校を転々とした。

最終的にコネチカット州のハートフォードの高等学校に学んだが、ここを勧めたのが、同州の教育長で高名



米留学中の様子が記された 相馬の英文日記

な教育者ノースロップだ。ノースロップは、ハートフォード高等学校からニューヘブンのエール大学に進むよう田尻に助言したようだ。田尻はここに落ち着き、普通学科に打ち込んだのである。

篤志家に救われる

そんな田尻の元に、相馬同様、突然、文部省から帰国命令が届く。田尻を救ったのは、同校長のケプロンの厚意であった。田尻の学才を惜しんで私費を投じてくれたのだ。ケプロンの死後も引き続き行われた。



田尻と当時の留学生たち(後列右から3人目)

相馬は学費の工面でいったん帰国を余儀なくされたが、田尻は現地の篤志家に救われた。こうして明治7年(1874)に同校を卒業することができた。

田尻は、軍人か法律学専攻を目指したが、日本からの多くの留学生が法律学を学ぼうとしている状況を見て、経済学、財政学を学ぶことも必要、この分野を専攻して新生国家に貢献しようと決意した。

同年、ニューヘブンのエール大学に入学し、明治10年(1877)6月、同大学文科を卒業し、学位を得た。引き続き同大学大学院で学んだ。

この大学院時代に、相馬永胤、三浦(鳩山)和夫の二人が入学。友情を深め、相馬とは「興学社」を興し、法学、経済学、化学、工学などの日本留学生を糾合した。また相馬とともに「日本法律会社」(クラブ)の憲法を作った。クラブの集会も田尻の部屋、あるいは相馬の部屋で開いた。

田尻と相馬は連日のように往来し、相馬の日記の明治11年(1878)9月12日には「僕は田尻を訪ねたが、彼は不在だった。田尻は僕を訪ねたが、僕は不在だった。」とある。二人の往来は兄弟のようで、相馬と田尻が固く結ばれ、生涯の親交の土台を作ったのは、アメリカの地であった。

田尻は、留学中、質素を旨とし衣服にかまわなかったので、友人の間では号の「北雷」を「きたなり」と呼んで冗談を飛ばしていたという逸話がある。明治12年(1879)帰国。

● 目賀田種太郎 ●

日本人留学生を監督

相馬と将来計画話し合う

目賀田種太郎(めがた・たねたろう、1853~1926)は、ペリーが来航した嘉永6年、旧幕臣で静岡藩士の長男として、江戸本所太平町に生まれた。



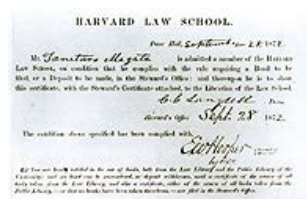
幼少のころは昌平坂学問所で漢学を学び、開成所に通い始めて英語、数学を修めた。英才の誉れ高く、明治2年(1869)、16歳の時に静岡藩学問所の英学世話掛にかかえられ、五等教授(講師に相当)となる。

翌3年(1870)、藩命により大学南校に入学。まもなく新政府によりアメリカ留学生に決まる。同年9月、飛脚船チャイナ号で横浜を立ち10月サンフランシスコに到着した。目賀田17歳の時である。

目賀田はニューヨーク郊外トロイのアカデミーやボストンで語学を身につけると明治5年(1872)、ハーバード法律学校(現・ハーバード大学)に入学。必須条件とされた「キリスト教徒であること」に対して一歩も譲らずに意を述べて、入学許可を得た。

二度の渡米で

一般法学の大意、国法学を学び、とりわけ国際公法の研究に意欲を燃やしていた。文部省は明治6年(1873)、海外留学生に帰国命令を出して帰国させ、留学制度を改めて貸費留学生規則を定めて再び留学させる方針を出した。目賀田はさらに欧州に留学したい希望があったが、かなえられず、同7年(1874)、同校を卒業し学位を得て8月に帰国した。



目賀田のハーバード法律学校への入学許可証

日本に戻った目賀田は明治8年(1875)5月、留学生監督を命ぜられ、開成学校の生徒9人を引き連れて再度渡米した。生徒は三浦(鳩山)和夫、小村寿太郎、菊池武夫、斉藤修一郎、長谷川芳之助、南部球吾、松井直吉、原口要、平井晴次郎であった。のちに政財界や教育界で活躍する俊英ぞろいであった。

アメリカで目賀田は、同行した9人の指導をするかわら、自らも法律の研究を続けた。コロンビア、エー

ル、ハーバード、ボストンの法律学校にある留学生と連絡をとりつつ、自由に研究を深めたのである。

明治9年(1876)、フィラデルフィアで、アメリカ独立100年記念の大博覧会が催された。日本から時の文部大臣の田中不二磨が派遣され、5月から約半年間、米国各地を回り、各州の教育制度を視察したのだが、目賀田は田中に同行して、各地を案内したのだ。

この時、相馬永胤、田尻稲次郎ら日本からの留学生はフィラデルフィアに赴き、同博覧会を見学、田中と会談した。

目賀田はニューヨークで、相馬らとともに「日本法律会社」を結成。ニューヘブンでも相馬、田尻、箕作佳吉、松井直吉らと親しく交わり、特に相馬とは最も親しく、しきりに将来の計画を話し合った。専修学校設立も、二人の将来計画のひとつにあった。明治12年(1879)帰国。

● 駒井重格 ●

藩主と一緒に留学

横浜で米人から英語学ぶ

駒井重格(こまい・しげただ、1853～1901)は、嘉永6年江戸八丁堀の桑名藩江戸屋敷に生まれる。

慶応3年(1868)15歳で家を継いだ。戊辰戦争では桑名の藩兵隊に属して、藩主・松平定敬に従って各地を転戦。藩内に広く認められるようになった。

新藩主の松平定教は、アメリカに留学することが決まり、まず英語英文を習得することが必要になり、駒井らを連れて、横浜で米国教師ブラウンから2年間、英語を学んだ。

「明敏な青年です」

明治7年(1874)11月、松平はアメリカに向かい、駒井は松平の随行者としてその1カ月後に渡米した。この時、ブラウン師は、アメリカのニュージャージー州ニューブルンスウィクの著名な牧師J・Mフェーリス宛の次のような紹介状を駒井に与えた。

「過去2年間、わたしのもとで学んだ生徒で、研究のため、合衆国に渡航する駒井君に託し、この手紙を差し上げます。同君はグレート・リパブリック号で当港を出帆した松平という青年の友人です。以前、伊勢の桑名の大名、松平の家臣のひとりでした。私はこれら両名の青年紳士に深い興味を持っています。駒井は18歳で松平は17歳。二人ともアメリカにはほぼ10年間とどまり、日本に帰る前に大学を卒業したい意向です。二人はいずれも善良で立派な青年です。駒井はなかなか明敏な青年です。どうか二人に対してアメリカ留学中、特別な配慮にあずかりたく、お願い申し上げます。駒井にはニューブルンスウィクへ行くよう勧めておきました」

この紹介状が、駒井の留学の支えになったことは言うまでもない。

松平と駒井がニューヨークの対岸、ニュージャージー州ニューブルンスウィクに着いたのは、明治8年(1875)2月ごろ。二人はまず、同地の大学予備校ニューブルンスウィク・アカデミーに入っておよそ2年間、英語英文と普通学を修めた後、明治10年(1877)同地のラトガース大学に入学、駒井は文科で経済学を学んだ。英語のほかフランス語も学び堪能だった。

渡米4年の留学期間中に、同じ経済学を学んだ田尻稲次郎や相馬永胤、目賀田種太郎らと知り合い、友情を深めた。そして彼らとの間で、東京に法律学校を興して日本語で法律、経済学を教える計画を立てた。

松平が帰国した後、駒井は残ってしばらく経済学の研究を続けるかわら、田尻や目賀田、相馬らと学校設立について話し合った。明治12年(1879)、田尻らとともに帰国することになる。

田尻が帰国するにあたり、駒井のもとを訪れた際、田尻が着ていた服があまりにも粗末で、見かねた駒井が、自分が新調したばかりの背広を田尻に与えた。友人思いの、駒井らしいエピソードだ。

田尻との友情は、終生続いた。



駒井のパスポート

「専修大学125年 1880～2005」

専修大学125年の歴史を、写真中心に紹介。主な内容は、「創立者たちの建学の志と友情」「草創期」「激動期」「再建期」「拡大・充実期」「SENSHU VISUAL HISTORY」「資料編」にまとめられている。

頒布希望者は、

郵便番号：101-8425

東京都千代田区神田神保町3-8

電話：03-3265-5879

専修大学・大学史資料課まで。

